

論文の内容の要旨

論文題目 青少年男子の性的身体の管理をめぐる社会史
—1890～1940年代の就学者層を中心に

氏 名 澁谷 知美

本研究の目的は、1890～1940年代の日本における青少年男子の性的身体の管理の内実を明らかにすることで、近代以降の男性の性的身体をどのように見るべきか、その認識枠組みを提示することである。

1980年代以降、日本では、フェミニズムの興隆によって、男性の性や身体にかかわる事象が「社会問題」化されてきた。たとえば、性暴力やセクシュアルハラスメント、買春行為やポルノグラフィの消費である。一方、アカデミズムの世界でも、男性の性や身体を対象とした研究が盛んに行われつつある。しかしながら、男性の特定の性行動を説明する原理（たとえば、「権力志向」「女性嫌悪」「ホモソーシャル」など）についての議論は蓄積を見せつつあるものの、そうした原理を習得し、実践し、再生産する物質的基盤である「男性の性的身体」そのものをどう捉えるべきか、そもそも社会においてどのような位置づけを与えられているから「男性の性的身体」はこれら行動原理を実践するのか、そうした疑問が解明されているわけではない。

そこで本研究では、近代以降の男性の性的身体をどのように見るべきか、その認識枠組みを示すことを課題とする。そのために、「近代において、男性の性的身体はいかなるものとして位置づけられたのか」という問い(①)を設定し、

さらに「1890～1940年代において、男子学生の性的身体は、教育者や医者らによって、どのように管理されたのか」という問い(②)へと再定式化する。そして、「1890年代、教育者や知識人たちは、どのような言説によって男子学生に性的身体の使用を禁じたのか」(問い②-1)、「教育者や知識人たちが、男子学生に性的身体の使用を禁じた結果、教育の現場ではいったいどのような非言説実践が行われることになったのか」(問い②-2)、「1910年代、性教育を説いた医学者や教育者たちは、どのような言説によって男子学生に性的身体の使用を禁じたのか」(問い②-3)、「性教育学者たちが、男子学生に性的身体の使用を禁じた結果、教育の現場ではいったいどのような非言説実践が行われることになったのか」(問い②-4)という4つの問いへと細分化する。

これらの問いに対する解を導くために、次の作業を行う。問い②-1を明らかにするために、木下広次、福沢諭吉、徳富蘇峰ら、1890年前後の教育者や知識人による、男性の「立身出世」と「品行」にまつわる言説を検討する(第1章)。問い②-2については、同時期に社会問題化した「学生風紀問題」と、それを契機として行われるようになった教育者や警察による学生の性的行動の管理の内実を見る(第2章)。問い②-3については、1910年代以降興隆を見た性教育言説のうち、花柳病(性病)罹患の恐ろしさを青少年に教え込もうとする言説を取り上げる(第3章)。問い②-4については、同時期より学校の入学試験にて行われるようになった、被検者の男性器を直接調べることで花柳病に罹患していないかどうかを確認する検査、「M検」を分析の俎上に載せる(第4章)。

それぞれの問いにたいする答えをあらかじめ述べるならば、次のようになる。②-1の言説については、「立身出世」と登楼や恋愛などの「性的身体の使用」とは両立しないこと、価値があるのは前者であること、を学生たちに伝えるものが該当する。これら言説は、今「性的身体の使用」を行えば、将来の「立身出世」はおぼつかないと説くことで、学生たちに性的行動を慎ませることを眼目としている。ここに「性から遠ざからねばならない時期としての学生時代」が成立した。

②-2の非言説実践については、教育者や警察による校外取締りが挙げられる。1890年代末から1910年代はじめにかけて、さまざまな訓令・通牒等が文部省や警察から出され、登楼や男色など、少し前までは「学生文化」として見

過ごされてきた性的行動が取締りの対象となる。また、こうした大人側の動きを受けて、学生生徒じしんが自他に自重を呼びかけるようにもなる。ここに、学生の性的行動を管理／自己管理することは、教育者、警察、学生本人たちの「当然の任務」となった。

②－３の言説については、結婚前にみだりに性交渉を行うことで、花柳病に罹患したり、性交渉に耽溺することになり、人生が破滅する、といった内容のものが該当する。ここでいう人生の破滅とは、志した事業の達成、妻子との幸せな生活など、「男性にとってのぞましい人生」が不可能になることである。性教育とは、「近代医学」の知によって、男子学生を「男性にとってのぞましい人生」へと誘導する言説であった。

②－４の非言説実践については、入学試験という「立身出世」のパスに、花柳病検査であるM検が組み込まれた事実が挙げられる。その事実は、学生に自己の身体が性的機能を備えていることを自覚させ、「性的身体の使用法を誤ると、立身出世にひびくらしい」ことを学生にメッセージする。学生は、立身出世に使える身体が立身出世を邪魔するものでもあること、立身出世をするためには、性的身体を自己管理することが必要であることを知る。立身出世をのぞむ生徒は自制をするようになる。M検とは、学生に性的身体の自己管理を促す契機であった。

以上の知見に依拠しつつ、推論も交えながら、「近代において、男性の性的身体はいかなるものとして位置づけられたのか」という問い(①)に答える。

男性身体は第一義的に「生産する身体」として、第二義的に「性的身体」として、社会において位置づけがなされたといえる。

「生産する身体」は、生産を「良きこと」として価値づけ、もっぱら生産に従事するキャリアを「良きもの」とする「生産称揚言説」と、男性の身体は頑強であるというイメージを形成する「男性身体＝頑強言説」によって、意味付与されている。前者は、国家の利益のために粉骨最新することを至上の価値とした上で、その具体的方法を官庁や企業といった生産領域に従事することとし、そうしたルートに乗ることがそのまま個人の「立身出世」となることを説くメッセージである。男性身体にたいする生産性発揮要求ともいえる。しかし、そのような要求は時に個人の心身の限界を越えさせる無理を強いることがあり、バーンアウトする身体が出てきてしまう。要求にたいしていちいち男

子が傷ついたり、命を落としたのでは、男子を生産領域に配置する近代社会システムがうまく機能しない。よって、後者の「男性身体＝頑強言説」が必要とされる。男性身体は身体的／精神的圧迫にたいして頑強であるという、この言説によって、男子を幸福な「感覚鈍麻」状態に置くことができる。こうして、社会は、男性身体を「生産する身体」として動かすことができる。

「性的身体」は、男性の性欲の抑制は困難であるとする「抑制不可能言説」と、男性身体が性的目的に供されることを称揚する「再生産称揚言説」によって、意味付与されている。前者は、男性の身体は性欲で満たされているもの、男性の性欲はコントロールが効かないものといった、性教育言説に見られた前提である。後者は、よき妻、よき子どもを得られる身体を称賛し、買春などの婚外性交を奨励する言説である。よき妻子を持つことが称揚されるのは、生産領域での男性の成功を分かりやすく可視化するためであり、婚外性交が奨励されるのは、生産領域における男性の活動を活性化すると考えられているため、という事情を考慮すれば、この言説は、「生産称揚言説」の「性的身体」ヴァージョンと考えられる。

と同時に、「性的身体」には、これらの言説が浸透しない感覚＝領域もある。さしあたり「脆弱な感覚＝領域」と呼んでおく。具体的には、一部の学生が感じたであろうM検にたいする得もいわれぬ嫌悪感と、そうした嫌悪感を学生に覚えさせた身体領域＝ペニスのことである。脆くて、弱々しく、不安定で、柔らかく、傷つきやすい感覚＝領域は、「抑制不可能言説」や「再生産称揚言説」による意味づけを拒否する残余領域である。

ところで、「生産称揚言説」は「抑制不可能言説」と背反する。「男性身体＝頑強言説」は「脆弱な感覚＝領域」になじまない。しかし、基本的に「性的身体」は「生産する身体」に従属するものとして位置づけられているから、「性的身体」が身の外へと放逐されることはない。とはいえ、男性の身体に両義的な意味づけがなされていることは確かである。

したがって、「近代において、男性の性的身体はいかなるものとして位置づけられたのか」という問い(①)に答えるならば、「生産する身体」に従属しつつも、「生産する身体」に背き、あるいは「生産する身体」になじまないものとして位置づけられた、というものになる。